

**1. 活動報告（事務局 記）**

- 10月28日（火）（臨時活動）午後1時よりもち米の脱穀を行い40分で済み余力がありましたので蕎麦の刈り取りも行い乾燥ハゼかけしました。11名の参加でした。  
尚 脱穀後の稲わらは厩肥作成に運搬し、モミはその晩に臼を挽きました（臼挽さんの都合で夜となり）。ハゼかけ乾燥は少し乾燥度が悪かったようですが、調子よく挽くことができました。260kgとたんぼを作り始めて2度目の最高収穫でした。これは約10俵/反当りの出来になります。合鴨と馬の厩肥による有機肥料と合鴨による無農薬がもたらしたものと思います。もちろん天候にも恵まれ、台風も来なかった自然環境も最高に良かったこともあります。当然、会員皆様の努力も忘れてはなりません。今年の収穫祭（餅つき）は盛大になる予定です。
- 11月3日（月）会員15名、観察隊親子16名の参加を得まして蕎麦の脱穀（足ふみ脱穀機と手こぎ）で行いました。そのほかたんぼへ切った蕎麦茎や稲わらを散布しました。昔ながらの足ふみ脱穀機は、観察隊隊員親子には良い経験が出来たと思いますが、中々難しく怪我なく無事済みしました。脱穀した蕎麦は一週間くらい現地で乾燥し、篩選別、唐箕による風選別、水選別、乾燥、ヘタ除き、最後に粉挽きとなります。
- 11月15日（土）厚東川、厚狭川、有帆川協議会主催「里山体験学習」の一部として、ビオトープへ御一行（児童24名、保護者17名、福祉センタースタッフ刀禰課長含む4名、）が来場され、当会の原田副会長、西原、松原、原田マ会員4名にて挨拶と説明会を行いました。たんぼで孵化し養育していたメダカをお土産にし、大変喜んでいただきました。
- 11月22日（土）  
午前 里山保全事業 防腐剤塗装（東屋、ビオトープ看板2か所、休憩台3台）  
エコアップ 止水池のガマの穂 抜き取り、ため池排水部のイグサ抜き、湿地帯菅間引き）  
17名の参加でした。  
午後 里山自然観察隊「里山の暮らし」  
竹細工（竹トンボ、竹笛製作）わら細工（わかざり製作）そば粉挽き（石臼）  
会員指導者11名、隊員22名 保護者会員12名でした。

**2. 今後の予定（事務局 記）**

## ◎ 見学者

—12月6日（土）

収穫祭の見学案内者：JA山口宇部農協 組合長、宇部市長、ほか

## ◎ 行事

—11月下旬 「厚東川水系協議会・宇部市環境共生課・ビオトープをつくる会」三者会議  
“ビオトープ借用土地の協議会”市役所会議室にて

—12月5日（金）午前中 餅つき準備（米ときぎ）

—12月6日（土）収穫祭 Part-1（餅つき）

—12月20日（土）収穫祭 Part-2（蕎麦打ち） 里山自然観察隊解隊式

—12月20日（土）午後 忘年会

### 3. 来訪者の声 （東屋のノートより一部抜粋）

—10月11日 今日、ビオトープに来て、友達と一緒に来てみれば、はやがいっぱいいました。はやのえさやりをやってみればはやがたくさんいました。思い出ができました。

かじ谷ゆうき

—10月11日 今日ビオトープに行ってみた。目の前には田んぼの水が引いてあった。カモは「ギャギャ」となっていた。秋の虫がたくさんいた。いい思い出ができました。

かじ谷の友達？

### 4. 会員の声 （原田満州夫）

#### “合鴨の飼育と稲作について -Part-3”

7羽になった合鴨は、田んぼの稲穂が出始めて穂を食べるということで、8月28日ハス田の中に戻された。戻すに当たっては数人で大変だったことを覚えている。

田んぼのほうは合鴨のおかげで、イナゴ類の害虫もいなくなり稲の出来も合鴨の排出する有機肥料も助け素晴らしい出来であった。後ほど収穫した玄米が反当10俵とまれにみるものであったのは天候のおかげだけでなく、合鴨が果たした功績が大である。

7羽は田んぼからハス田に移す時、慣れない人間が多数来て追いまくられたのを根に持って当分飼い主の言うことをきかず、慣れるまで1週間くらいかかった。合鴨の学習能力がそれほどあるとは思わないが、怖い目にあったことはなかなか脳から離れないのであろう。

合鴨の今後のことで出席会員で検討したところ2羽（つがい）を残してあと5羽は何方かに頂いてもらうことになった。幸い先輩合鴨（今年3月に孵化した昨年度のこども）の引き取り先に養子先が決まって11月5日にオス3羽のみ確保し、国道二号線沿いの“つるや食堂”裏の池に先輩カモと面通しし仲良く入水することができた。約束の2羽つがいを残すことは又当分慣れるまで時間がかかりそうである。

合鴨は、稲作では特に優位なことばかりである事が判った。また合鴨は来訪者に対しての癒し、特に子供さんには格別なものがあつたと信じている。世話をするものも愛玩動物の一種のつもりもあつた。深く世話をすればするほど別れがづらいのはいずれも同じである。

問題は来年の合鴨農法を継続するか否かである。せっかくきらめき財団ジャンプアップ助成事業として合鴨農法を取り入れたにもかかわらず、合鴨の最終処分をためらってやめるわけにもいかない。

## 5. ビオトープ関連 (ビオトープのトンボたち) 管 哲郎

### (6) コシボソヤンマ (ヤンマ科) *Boyeria maclachlani* (SELYS, 1972)

日本特産種ではほぼ日本全土に生息しています。成虫は6月～9月にみられますが、平地や丘陵地の樹木の多い溪流などを好み、日中は林の中や溪流に沿った樹木の中などで休止していることが多く、夕方になると活動が活発になり夕焼け空を黄昏飛翔したり川面を低く往復縄張り飛翔をします。目を凝らさないと良く分からないほどに暗い川面をせわしく飛んでいますので、普通の人は見逃すことが多いのです。

オニヤンマを少し小さくしたくらいの大ささで、黒でなく茶褐色を主体色とし、その名の通り腰の付け根あたりが細くくびれており、折れることなく平気で飛び回ります。

2008年9月の観察会で、隊員の一人が♀1頭を見事に捕獲して本種の生息が確認できました。

数年前にも須賀河内川の 昭和山登り口付近で川面を縄張り飛翔する本種を筆者も確認していますが、捕獲には至りませんでした。

2008年7月待望の羽化シーンを撮影することができましたが、いつ、どこで羽化するのかを探すのに数年を要しました。

羽化は真夜中に行われるので真っ暗な溪流のそばでの撮影はさすがに恐ろしい思いをしたものです。

一般に平地での羽化は5月下旬頃より始まり6月末頃には終わりますが、標高の高い場所であった為に運よく羽化に出会えたもののようなのです。



コシボソヤンマ (♀)



コシボソヤンマ (♂)

## 6. 里山自然観察隊（里山の暮らし、11月22日、隊員22名、保護者12名、会員11名）

里山の暮らしということで、藁細工・竹細工・ソバ粉挽きをやってもらった。

藁細工は、輪飾りを作ってもらったが、ウラジロとユズリハを準備し（ダイダイがあれば本格的だが）、藁をたたくことから始めて、藁を漘って輪にして作ってもらった。

竹細工は、竹トンボと竹笛を作ってもらった。竹トンボは、羽の部分の薄くするのに、子供達は小刀をあまり使っていないためか、とても苦労していた。またバランスをとるのが難しく、右の羽・左の羽と交互に削っていた。うまく飛ばすことができた子供はとても喜んでいて、竹笛は、息を吹く側の竹の接触部分の穴の大きさと角度をうまく作るのが難しく、何度も削ってから相手の竹の穴に当てて音が出る位置を一所懸命探していた。やっと音がでると、うれしいのか喧しいくらいに「ピーピー」と鳴らしていた。

ソバの粉挽きは、はぜ掛け乾燥後脱穀したソバの実を臼で粉に挽いてもらった。これは12月のソバ打ちに使用するものである。

自然を観察するだけではなく、このように自分で何かを作るということも、里山の自然を知ってもらうことにもなると思っています。

（西原 一誠 記）

## 7. 会よりの連絡事項（事務局より）

- (1) 今年も残り少なくなりました。通常 収穫祭 PART-1・2のあと忘年会になるところですが、近年は蓮の生育も悪く蓮堀りは中止します。忘年会も皆様の意見をお聞きたく思います。
- (2) 収穫祭 Part-1（餅つき）収穫祭 Part-2（そば打ち）の多数参加をお願いします。またその準備も多々ありますのでよろしく願いいたします。

## 8. 編集後記

最近、通勤途中に車に轢かれた小動物をよく目にする。すみかを追われてか、えさを求めてか、分からないが、動物たちには住みにくい世の中になったのは間違いないだろう。

この間の新聞に、宇部市街のあるところでアナグマが出没したという記事が載っていた。本来、山間部に穴を掘って生活するらしいが、そのアナグマは数年前から人目を気にせず、柿を食べているらしい。そういえば、我が家でも最近になってタヌキを見かけるようになった。人を見ても逃げるわけでもなく、食べるものが無いのか、頭のない蛇を置き土産に置いていく事もあった。今、人間にとってどんどん住みよい世の中になっていく反面、動物の生きる場所が無くなっていく。これから、身近で見かけることが多くなるのか？ それとも、「身」なくなるのか・・・

（益田 真一 記）

今年は、いつに無く、冬が駆け足でやってきました。早々と初雪も降り、車窓からの西鳳翻も朝日をあびてきらきら輝いていましたが、毎日、日本海まで通勤している者にとっては、難儀な季節の始まりです。

下関での11月の初雪は十数年ぶりだとか。ここしばらく続いた暖冬も今冬は落ち着いて、冬らしい冬になるのでしょうか。かつて（数十年前）は、今より、早く冬が来ていたような気がしています。11月には、白いものがちらちらしていたような、気がしているのですが、年のせいだそう思うのかもしれませんが。

地球がどんどん暖かくなって来ているといわれている中、いつまでも季節の移ろいを感じられる世の中であってほしいものです。

（藤井 義晴 記）